



'21 環境に関する意識・実態調査 <第1回>

～生活者は環境への取り組みを、日常生活の中で実践～

- ◆ 環境に配慮した食品・食材の購入基準は「ごみの量が少ないこと」
- ◆ 環境負荷低減につながる食品ロス削減への取り組み、「残さず食べる」が最多

2021年10月8日

日清オイリオグループ株式会社

技術本部 中央研究所 生活科学研究課

近年、温室効果ガス排出削減等のための国際枠組み「パリ協定」の目標達成や、経済・社会・環境のバランスがとれた社会を目指す「持続可能な開発目標(SDGs)」の実現に向けて、世界中で環境への取り組みや環境負荷低減に資する技術開発などが積極的に進められています。

当社グループにおいても、環境理念として、かけがえのない地球を次の世代へ引き継ぐため、「植物のチカラ®」を最大限に引き出し、環境に配慮した企業活動に取り組んでいます。また、日々のニュースや日常生活の中でも、環境問題・環境配慮に関する情報や話題に触れる機会が激増しています。

当研究課では、生活者一人ひとりの環境意識が今後さらに高まると考え、「環境に関する意識・実態調査」を実施しました。

調査概要

実査期間 2021年6月18日～21日

調査手法 定量調査（インターネット調査にて実施）

調査地域 全国

調査対象 20～70代の男女

《別途：中学生・高校生※対象の調査》



実査期間：2021年6月22日～7月1日
調査手法：定量調査（郵送調査にて実施）
調査地域：全国
調査対象：中学1年生～高校3年生
サンプル数：n=600（学年均等割付）



※中学生・高校生：以下「中高生」と記載

n=2000（性別・年代・地域の人口構成比に応じた割付にて回収）

**サンプル
数・割付**

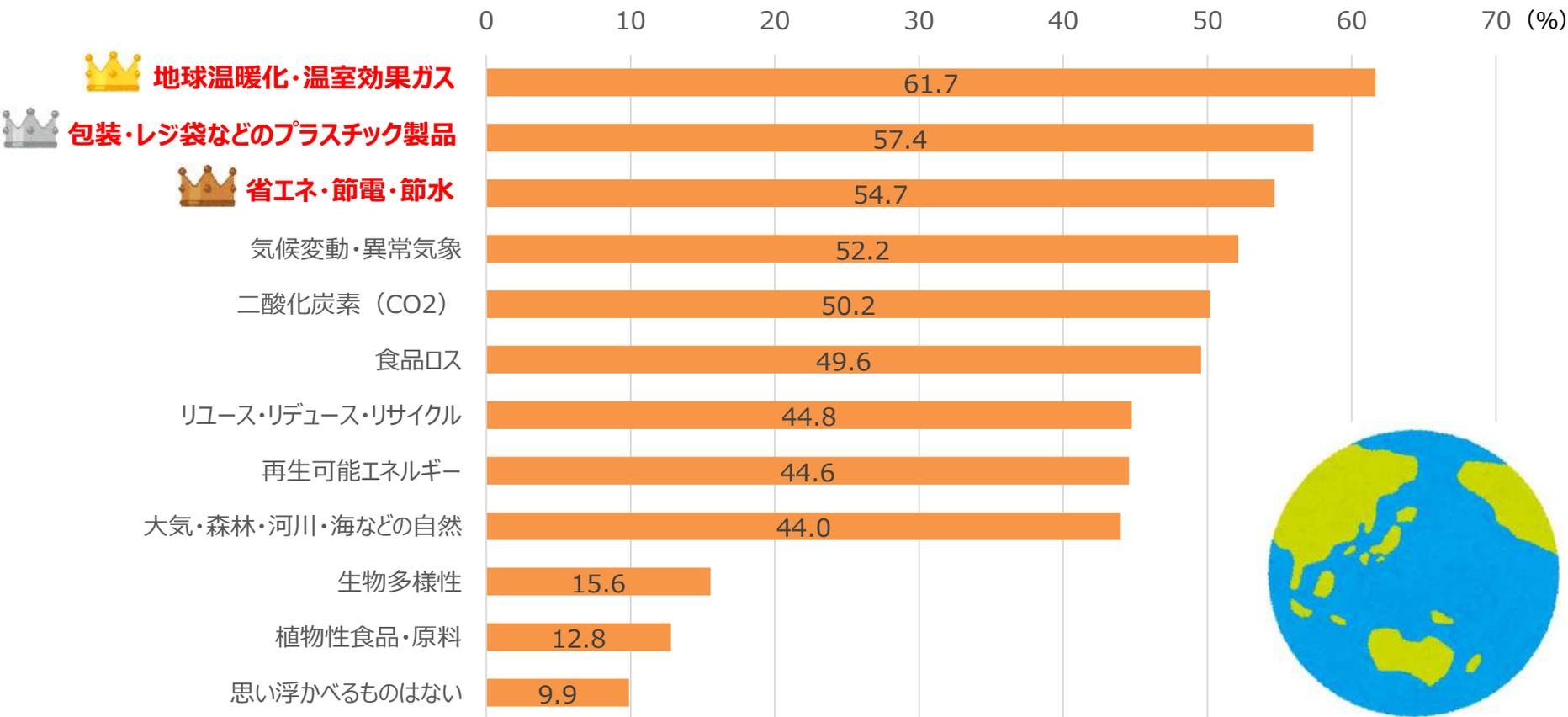
	合計	男性						女性						男性計	女性計
		20代	30代	40代	50代	60代	70代	20代	30代	40代	50代	60代	70代		
北海道・東北	222	13	16	21	19	22	18	12	16	20	20	23	22	109	113
関東	696	49	58	75	64	54	52	47	54	70	60	54	59	352	344
中部	361	24	28	37	32	31	30	22	26	34	31	32	34	182	179
関西	325	22	24	33	28	25	26	22	24	33	29	27	32	158	167
中国・四国	174	11	13	17	14	16	15	10	12	16	15	17	18	86	88
九州・沖縄	222	14	17	21	18	21	17	14	17	21	19	22	21	108	114
合計	2,000	133	156	204	175	169	158	127	149	194	174	175	186	995	1,005

- ①環境問題/配慮と聞いて「地球温暖化・温室効果ガス」を連想
- ②環境意識のきっかけ、「自然災害・異常気象を知って/経験して」
- ③環境への意識と行動は年代が上がるほど高くなる傾向に
- ④環境を意識するタイミングは“ごみの分別・収集に出す時”
- ⑤収集されたごみの扱われ方、どの年代も約半数が「知らない」
- ⑥ごみへの意識、“ごみはコンパクトに”が50%超
- ⑦環境に配慮した食品・食材の購入基準は「ごみの量が少ないこと」
- ⑧環境に配慮した食品・食材への関心、70代が最も高く62.8%
- ⑨環境配慮行動、利便性とのジレンマ
- ⑩食品ロス削減への意識、30代が最も低く48.8%
- ⑪食品ロス削減への取り組み、「残さず食べる」が約60%と最多

①環境問題/配慮と聞いて「地球温暖化・温室効果ガス」を連想

- 環境問題や環境配慮と聞いて思い浮かべることとして、「地球温暖化・温室効果ガス」が61.7%と最も高く、次いで「包装・レジ袋などのプラスチック製品」が57.4%と高くなりました。

《環境問題や環境配慮と聞いて思い浮かべること》



②環境意識のきっかけ、「自然災害・異常気象を知って/経験して」

- 環境を意識するきっかけは、「自然災害・異常気象を知って/経験して」が最も高くなりました。なお、中高生は「学校の授業で教わって」が最も高くなり、環境に関する言葉の理解度が高い傾向がありました。

《環境問題や環境配慮を意識するきっかけ(Top5)》

0 10 20 30 40 50 60 70 80 (%)

自然災害・異常気象を知って/経験して

45.1

買い物袋が有料になって

41.6

環境に配慮した商品を知って/使って

22.6

環境保護活動を知って/参加して

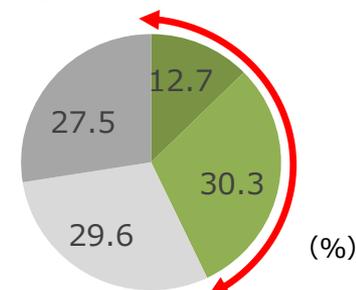
20.2

自治体の要請・活動が変化して

17.6

《環境に関する言葉の理解度》

[一例：SDGs]



- 内容を理解している
- 内容をある程度理解している
- 聞いたことはあるが、内容はよくわからない
- 知らない

【中高生】

《環境問題や環境配慮を意識きっかけ(Top5)》

0 10 20 30 40 50 60 70 80 (%)

学校の授業で教わって

77.0

買い物袋が有料になって

32.0

自然災害・異常気象を知って/経験して

31.3

環境に配慮した商品を知って/使って

13.3

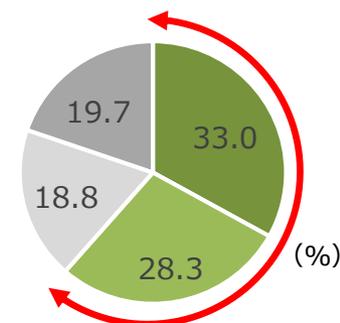
環境保護活動を知って/参加して

11.2



《環境に関する言葉の理解度》

[一例：SDGs]



Q .あなたが環境問題や、環境への配慮を意識するようになったきっかけは、どのような出来事でしたか。(MA)

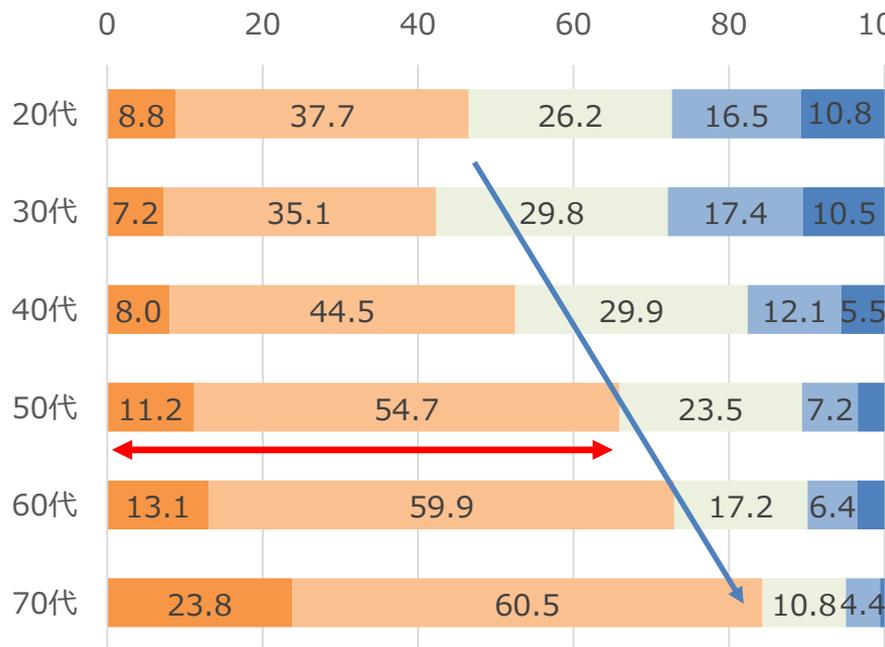
Q .あなたは [SDGs] をどの程度知っていますか。(SA)

③環境への意識と行動は年代が上がるほど高くなる傾向に

- 環境への意識、環境に配慮した行動ともに、年代があがるほど高い傾向にありました。また、どの年代も意識と行動には約10%※以上の差があり、特に50代では約20%※と大きな乖離がみられました。

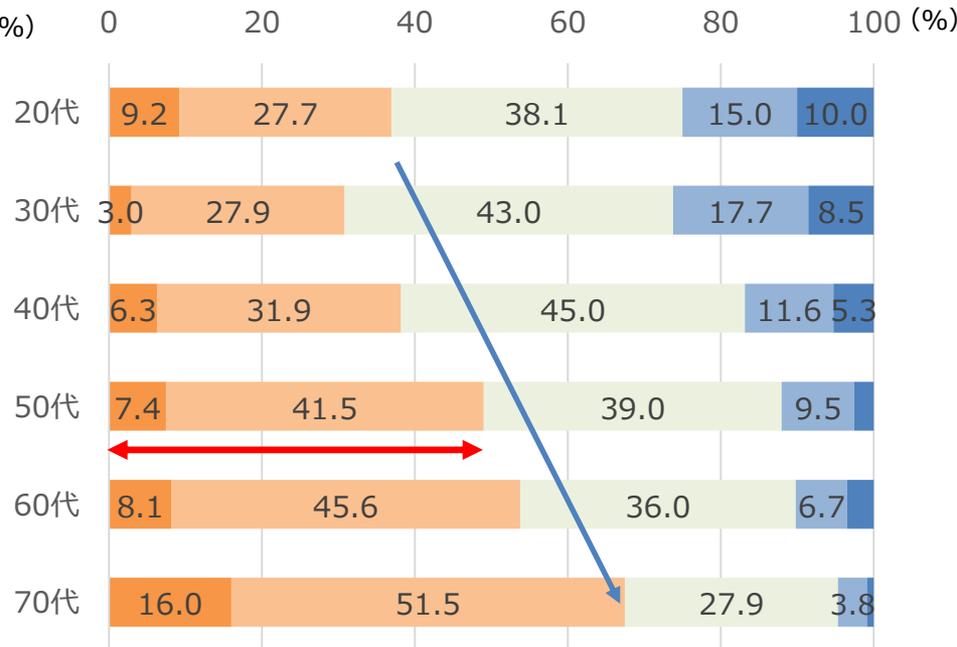
※「とても意識している」+「やや意識している」の合計、もしくは「積極的に行動している」+「やや積極的に行動している」の合計

《環境問題や環境配慮への意識》



■ とても意識している
 ■ やや意識している
 ■ どちらともいえない
■ あまり意識していない
 ■ 全く意識していない

《環境に配慮した行動》



■ 積極的に行動している
 ■ やや積極的に行動している
■ どちらともいえない
 ■ あまり積極的には行動していない
■ 全く行動していない

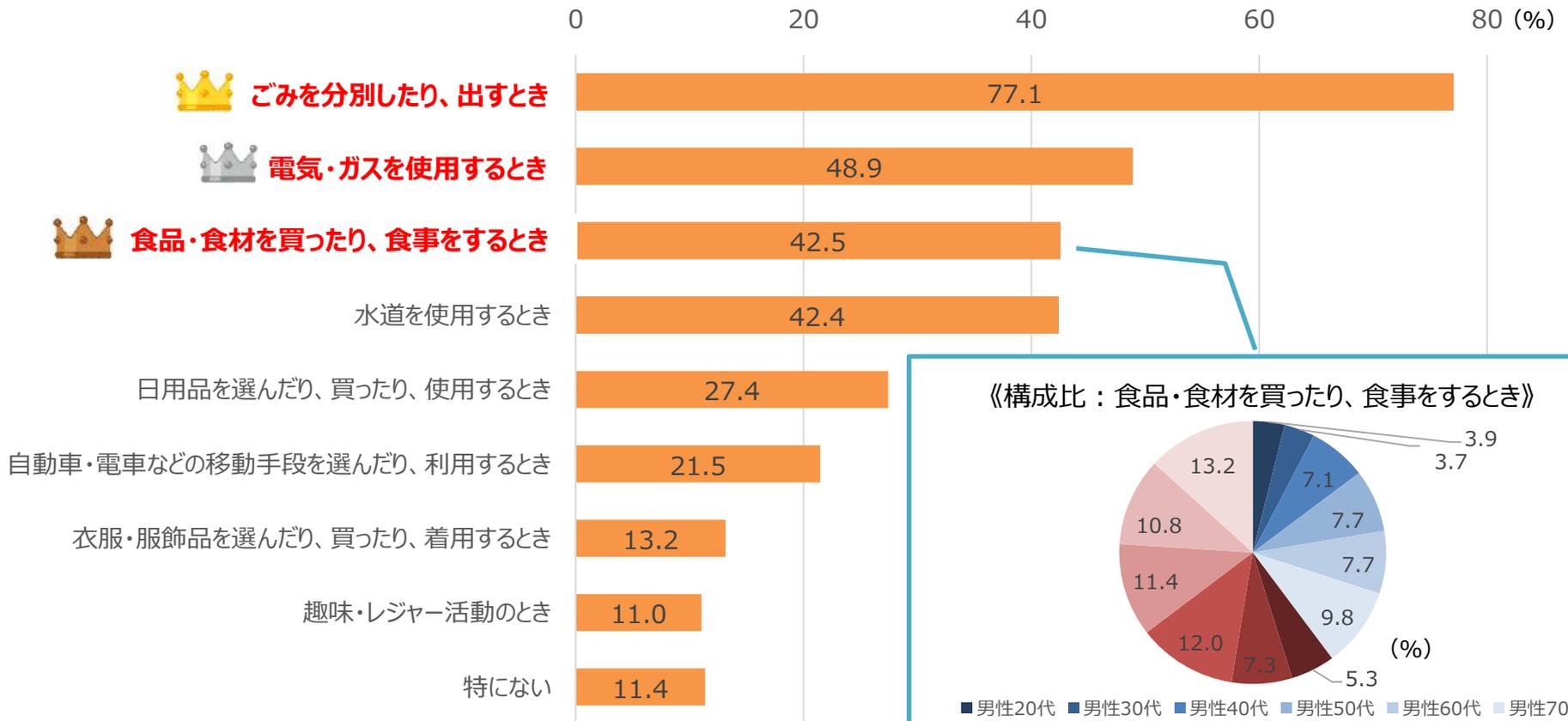
Q .あなたは普段、環境問題や環境への配慮をどの程度意識して生活していますか。(SA)

Q .あなたは日常生活の中で、環境に配慮した行動をどの程度していますか。(SA)

④ 環境を意識するタイミングは“ごみの分別・収集に出す時”

- 環境問題や環境配慮を意識するときは、「ごみを分別したり、出すとき」が77.1%と最も高く、次いで「電気・ガスを使用するとき」が48.9%と高くなりました。

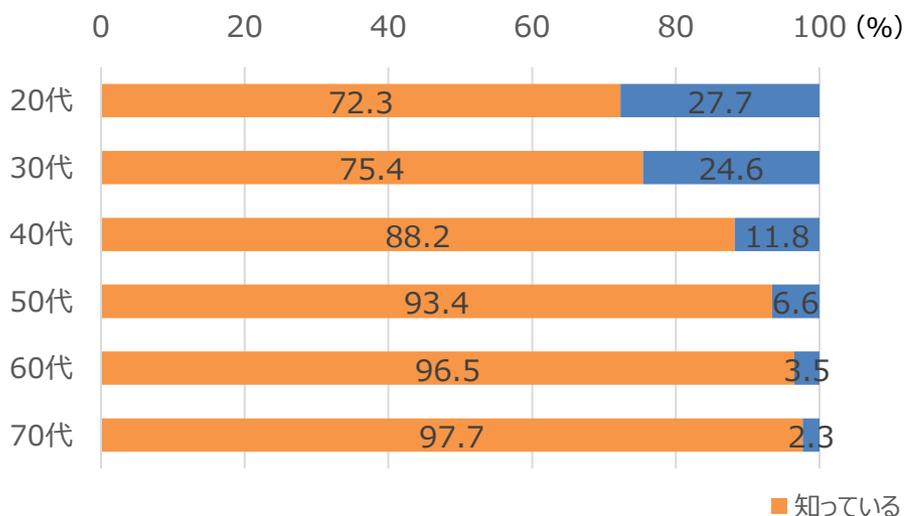
《環境問題や環境配慮を意識するとき》



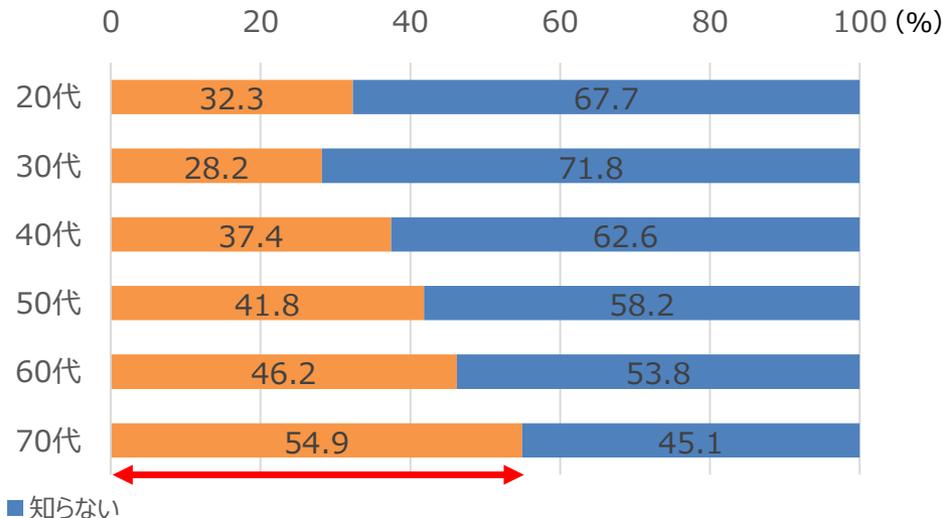
⑤ 収集されたごみの扱われ方、どの年代も約半数が「知らない」

- 「自治体のごみの分別方法を知っている人」は、どの年代も70%以上である一方、70代以外は「収集されたごみの扱われ方を知っている人」が、50%を下回りました。

《分別方法の認知度》

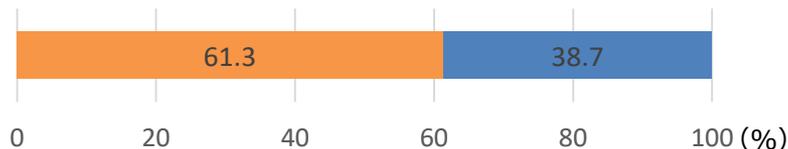


《分別収集ごみの扱われ方の認知度》

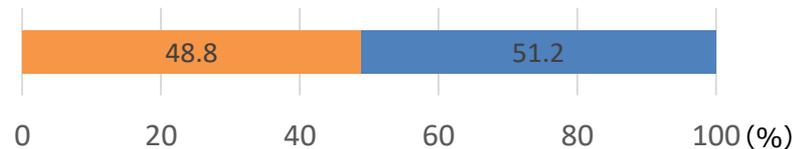


【中高生の認知度】

《分別方法》



《分別収集ごみの扱われ方》



Q .あなたは次の事柄を知っていますか。[ご自身が所属する自治体のごみの分別方法] (SA)

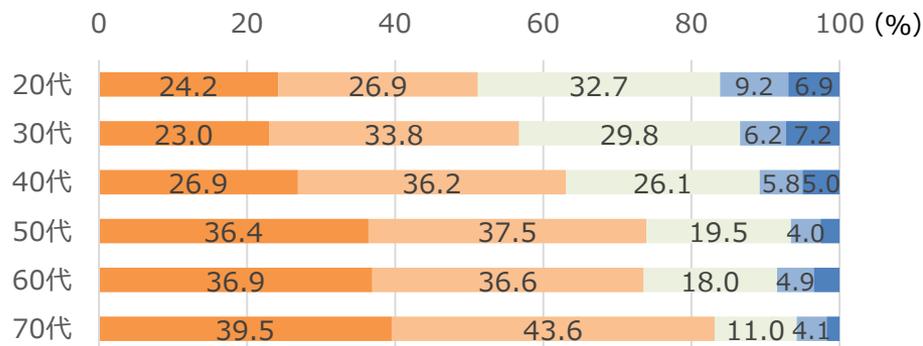
Q .あなたは次の事柄を知っていますか。[分別収集されたごみが、収集後にどのように扱われているか] (SA) 8

⑥ごみへの意識、“ごみはコンパクトに”が50%超

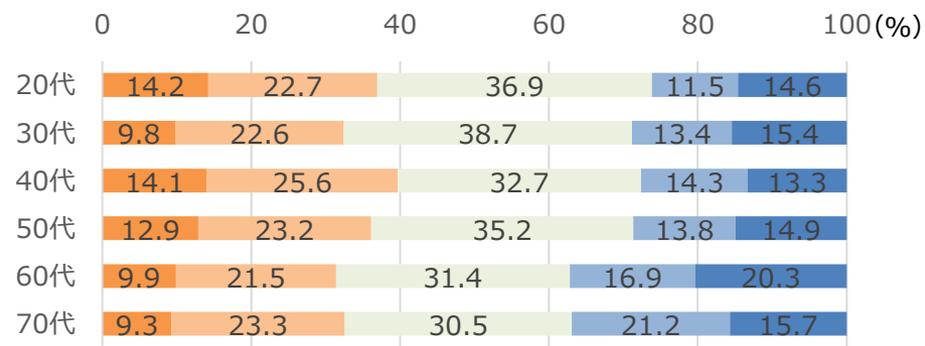
- 「ごみを捨てる時、できるだけ小さくして捨てるようにしている」人はどの年代も50%※以上、「商品を選ぶときには、簡易包装のものを選ぶようにしている」人はどの年代も30%以上でした。

※「あてはまる」+「まああてはまる」の合計

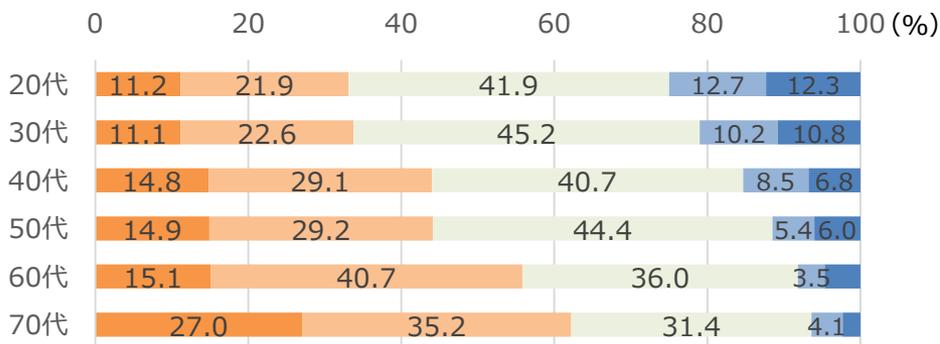
《ごみを捨てる時、
できるだけ小さくして捨てるようにしている》



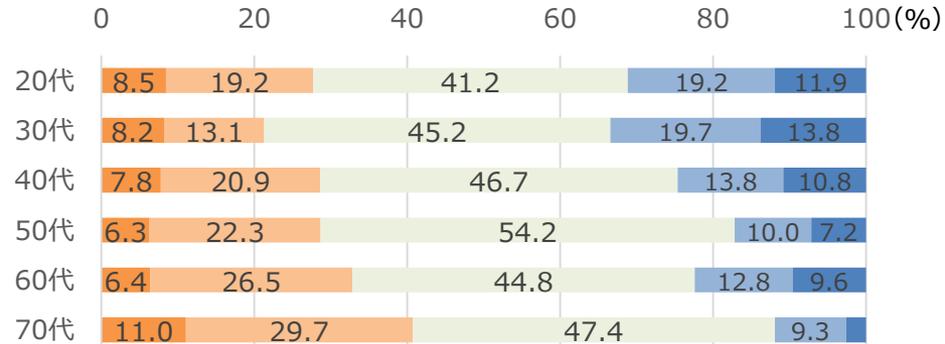
《使えるものは捨てずに、人に譲ったり、
フリーマーケットなどで売るようにしている》



《商品を選ぶときには、
簡易包装のものを選ぶようにしている》



《使い捨ての商品は使わないようにしている》

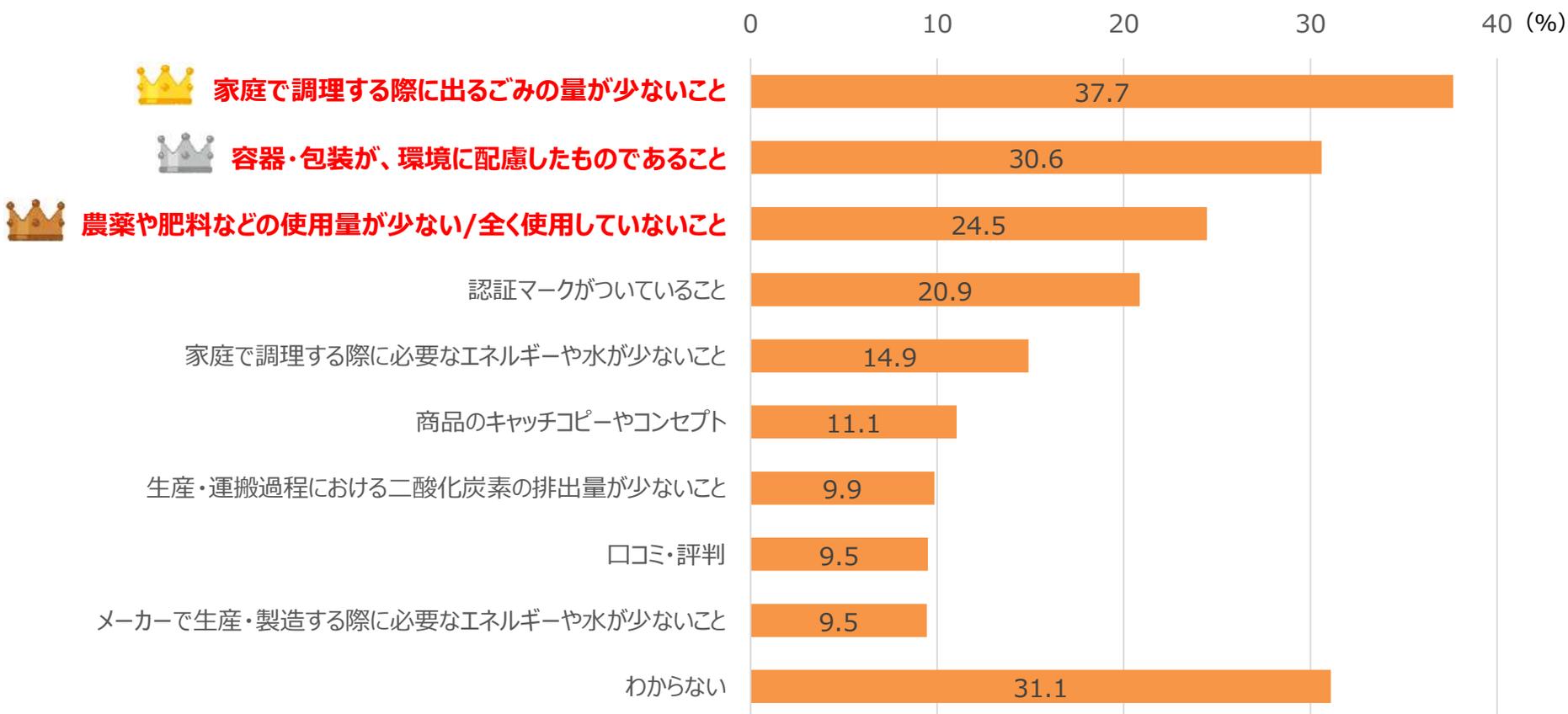


■ あてはまる
 ■ まああてはまる
 ■ どちらともいえない
 ■ あまりあてはまらない
 ■ あてはまらない

⑦環境に配慮した食品・食材の購入基準は「ごみの量が少ないこと」

- 環境に配慮した食品・食材の購入基準は、「家庭で調理する際に出るごみの量が少ないこと」が37.7%と最も高く、次いで「容器・包装が、環境に配慮したものであること」が30.6%と高くなりました。

《環境に配慮した食品・食材の購入基準》

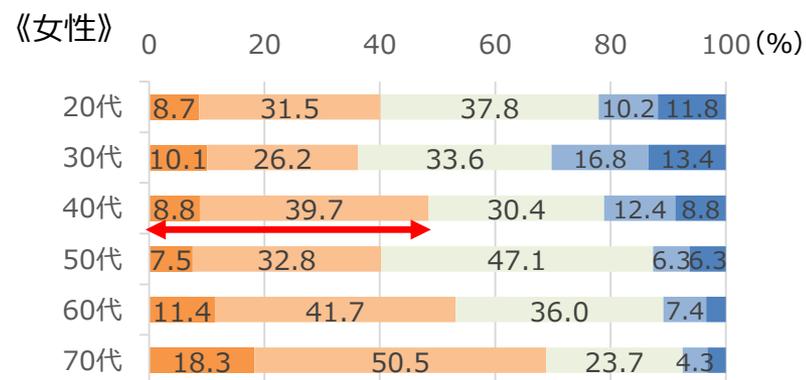
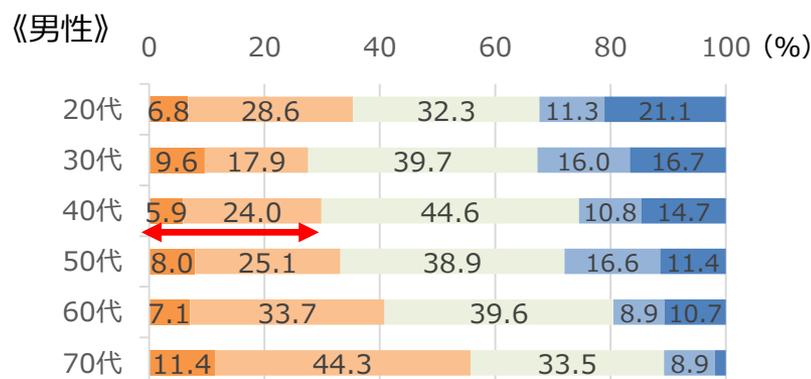
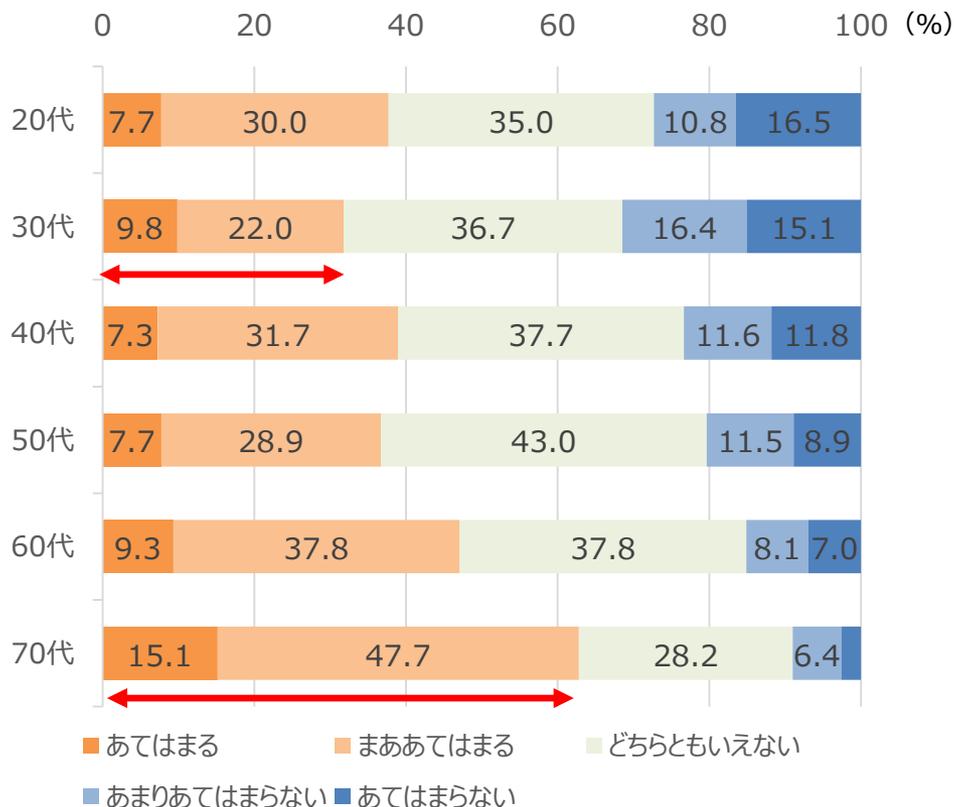


⑧環境に配慮した食品・食材への関心・興味、70代が最も高く62.8%

- 環境に配慮した食品・食材への関心・興味は、70代が62.8%※と最も高い一方、30代が31.8%と最も低くなりました。また、40代は男性より女性の方が18.6%高く、男女差が最も大きくなりました。

※「あてはまる」+「まああてはまる」の合計

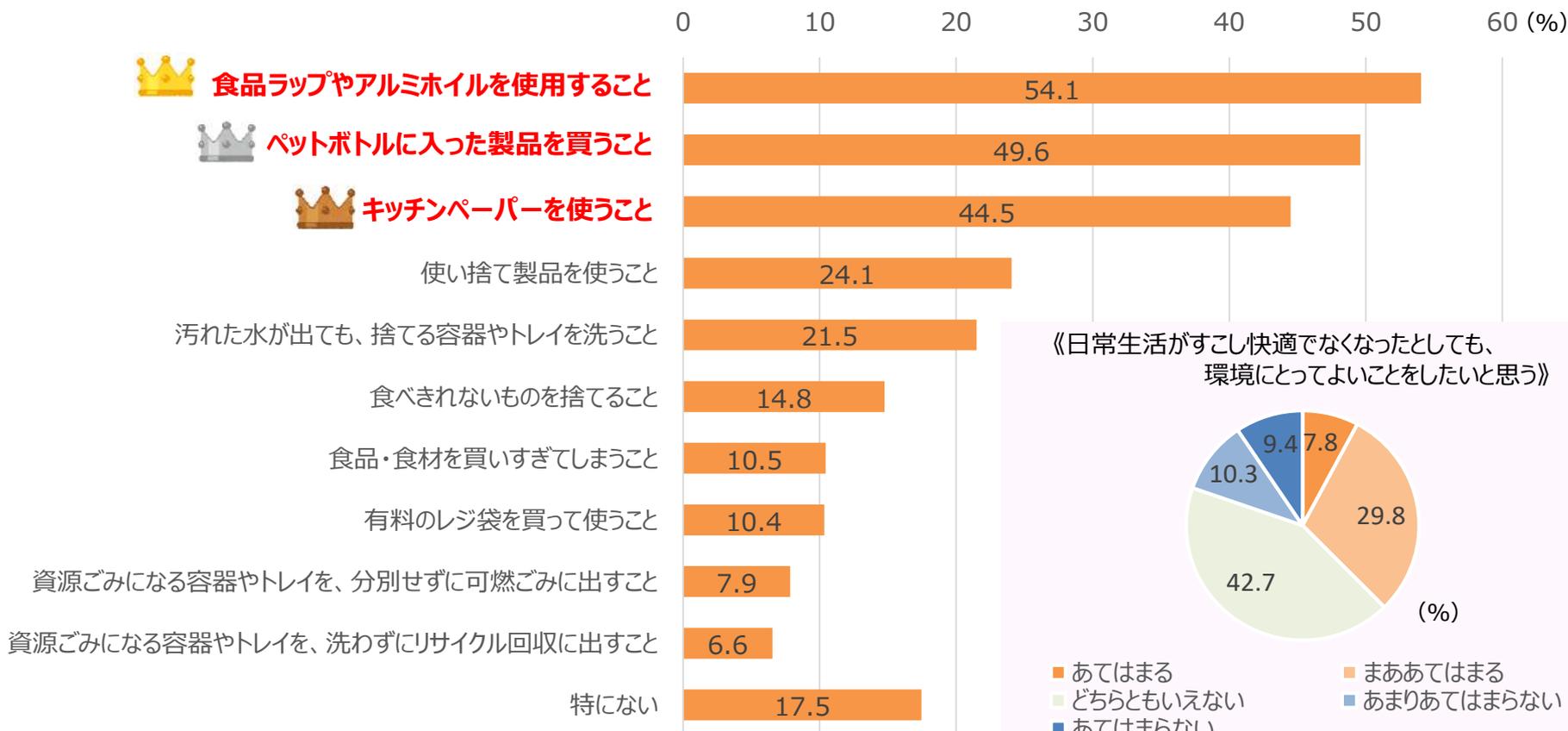
《環境に配慮した食品・食材への関心・興味》



⑨環境配慮行動、利便性とのジレンマ

- 環境への影響を気にしつつも、やめられないことは、「食品ラップやアルミホイルを使用すること」が54.1%と最も高く、次いで「ペットボトルに入った製品を買うこと」が49.6%と高くなりました。

《環境への影響を気にしつつも、やめられないこと》



Q.日常生活の中で、あなたが環境への影響を気にしつつも、やめられないことをお知らせください。(MA)

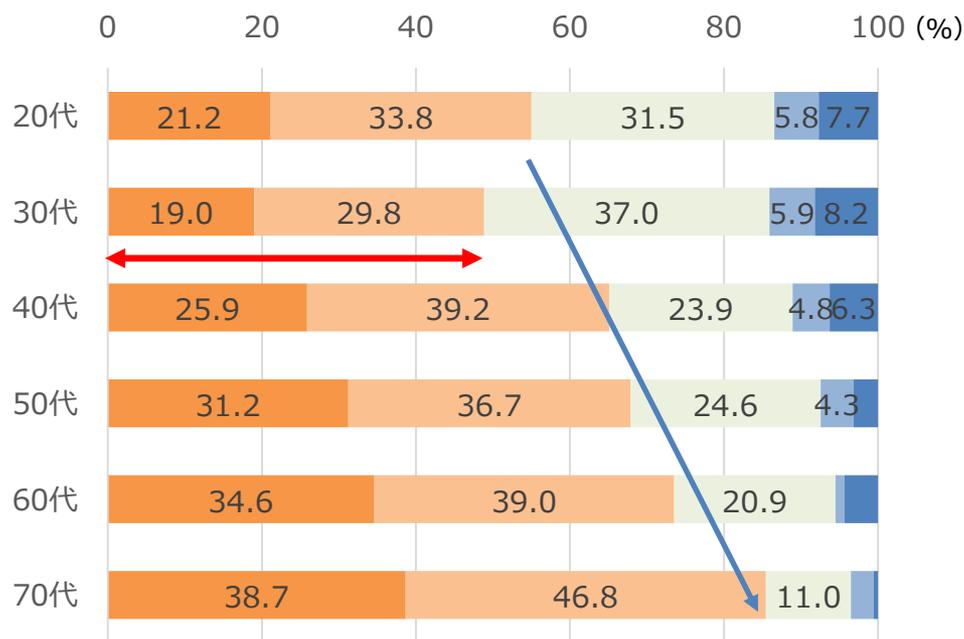
Q.あなたご自身は、どの程度あてはまりますか。[日常生活がすこし快適でなくなったとしても、環境にとってよいことをしたいと思う] (SA) ¹²

⑩食品ロス削減への意識、30代が最も低く48.8%

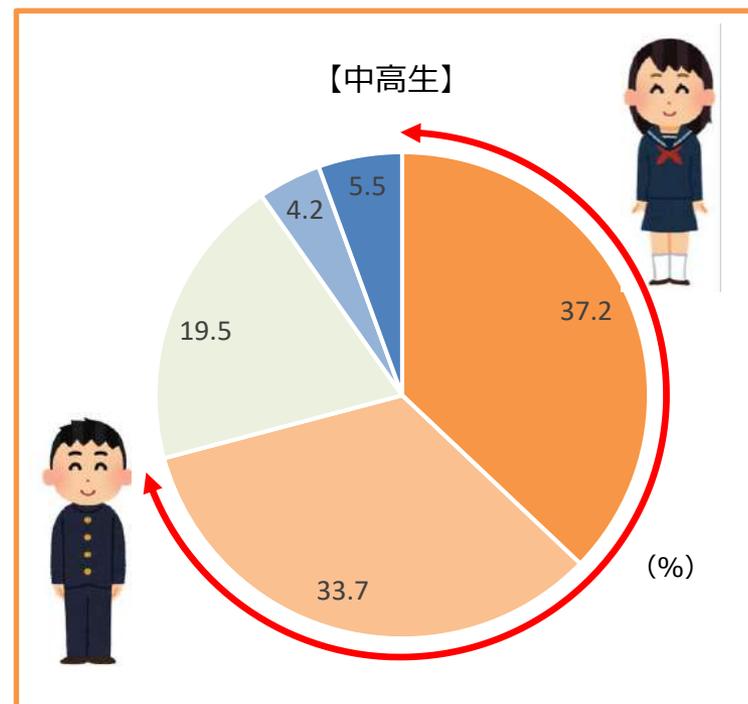
- 「食品ロスを減らすようにしている」人は年代が上がるほど高くなる傾向にありましたが、30代が48.8%※と20代を下回りました。また、中高生は70.9%と高くなりました。

※「あてはまる」+「まああてはまる」の合計

《食品ロスを減らすようにしている》



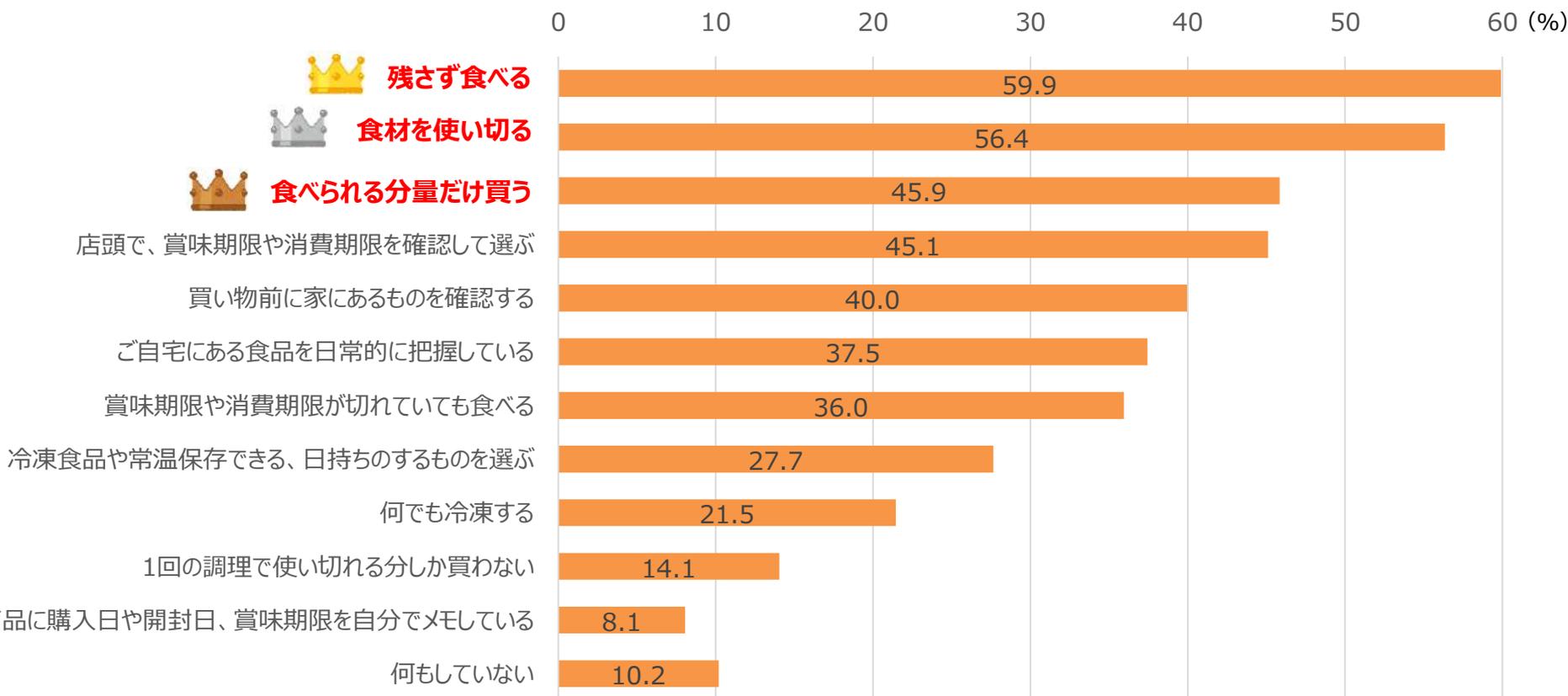
■ あてはまる
 ■ まああてはまる
 ■ どちらともいえない
■ あまりあてはまらない
 ■ あてはまらない



⑪ 食品ロス削減への取り組み、「残さず食べる」が約60%と最多

- 食品ロス削減のための取り組みとして、「残さず食べる」人が59.9%と最も高く、次いで「食材を使い切る」人が56.4%となりました。一方で、「何もしていない」人は10.2%でした。

《食品ロス削減のために取り組んでいること》



近年、地球環境の危機的状況に対し、従来型の大量生産・大量消費・大量廃棄といった社会システムや日常生活を見直し、世界全体で社会変革を図っていくことが求められています。

今回の調査では、環境問題・環境配慮と聞いて「地球温暖化・温室効果ガス」を思い浮かべ、「ごみを分別したり、出すとき」や「電気・ガスを使用するとき」に環境を意識する人が多いことがわかりました。また、食品ロス削減のために「残さず食べる」人や「食材を使い切る」人が過半数に達しました。このように、生活者は日常生活の中で無理をせず、環境に対してプラスの価値が得られることを自然と実践している様子が見られました。また、中学生・高校生を対象とした調査では、「学校の授業」が環境を意識するきっかけとなっており、環境に関する知識が豊富な傾向が見られ、教育の影響の大きさを感ずりました。2017年3月に改訂された新学習指導要領では、『一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待』されており、今後さらに生活者の環境意識が高まり、消費行動も変化していくことが予測されます。

日本は「2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」ことを宣言しており、実現には生活者との連携が必須です。例えば、消費者庁では消費者等への波及効果を有する食品ロス削減推進の取り組みの表彰、環境省では消費者・自治体・事業者等それぞれが主体的に食品ロスに関する情報を得ることができる食品ロスポータルサイトの運営など、既に生活者視点の取り組みが始まっています。今回のレポートが環境への取り組みを考える上で『誰のために』、『何のために』といった原点を振り返る一助となれば幸いです。

《お問合せ先》

日清オイリオグループ株式会社 技術本部 中央研究所 生活科学研究課 <https://www.nisshin-oillio.com>

〒235-8558 神奈川県横浜市磯子区新森町1番地 TEL.045-757-5461

※ホームページでは、バックナンバーをご覧いただけます。

※本レポートの文章、データ、イラストを許可なく複製、複製、転写することを禁じます。